

# 日本人英語学習者の統語産出傾向： 統語的プライミング実験による検討

## The Tendency of Syntactic Production by Japanese EFL Learners: A Study based on a Syntactic Priming Experiment

森下美和<sup>1</sup>, 磯辺ゆかり<sup>2</sup>, 斉藤倫子<sup>2</sup>, 門田修平<sup>3</sup>, 中野陽子<sup>3</sup>, 平井愛<sup>4</sup>  
Miwa Morishita, Yukari Isobe, Tomoko Saito, Shuhei Kadota, Yoko Nakano, Ai Hirai

<sup>1</sup>神戸学院大学, <sup>2</sup>関西学院大学大学院, <sup>3</sup>関西学院大学, <sup>4</sup>京都精華大学  
Kobe Gakuin University, Graduate School, Kwansai Gakuin University, Kwansai Gakuin University,  
Kyoto Seika University

<sup>1</sup>morisita@ba.kobegakuin.ac.jp

### Abstract

This study aims to investigate syntactic production by Japanese EFL learners, who were divided into upper and lower level students, compared to native English speakers based on a syntactic priming experiment using picture description tasks. The results show that the significant priming effect was only found in the case of lower level students. A possible explanation is that they had limited grammatical knowledge and tended to describe pictures using prime sentences as a sample, while other proficiency groups were able to create sentences more freely and were less susceptible to prime sentences.

**Keywords - language production, syntactic priming, picture description tasks**

### 1. はじめに

言語産出する際、直前に処理した文と同じ統語的パターンを用いる傾向がある。このことを統語的プライミング (syntactic priming) とする。本研究では、絵描写課題 (picture description task) を使用した統語的プライミング実験により、日本人英語学習者の統語産出傾向についての調査を行った。

### 2. 先行研究

Bock (1986) は、英語母語話者を対象とし、与格動詞を用いた 2 つの構文 [目的語+前置詞句 (PO; prepositional object) プライム文と間接目的語+直接目的語 (DO; double object) プライム文] を提示し、これらの文を復唱させた後、絵描写課題を与えた。その結果、PO プライム文では

PO 構文、DO プライム文では DO 構文をより多く産出する傾向が見られた。

本研究での統語的プライミング実験に先立ち、日本人が好んで使用する構文について調査するため、杉浦他 (2009) は、日本人英語学習者約 450 名を対象に、4 種類の統語構造 (①PO/DO 構文、②受動態/能動態、③接続詞、④心理動詞を含む文) が使用可能であると思われる絵の描写課題による実験を行った。実験参加者は、与えられた絵を見て、その絵に合う 1 文を、辞書を使わず、あまり考え込まずに出来るだけ素早く書くように指示された。その結果、①DO 構文より PO 構文を多く産出する、②受動態より能動態を多く産出する、③接続詞を用いず、単文で描写する、④心理動詞以外の構文を使用する、などの傾向が見られた。

### 3. 実験

Bock (1986) と同一手法を用いて、絵描写課題を使用した統語的プライミング実験を行い、日本人英語学習者および英語母語話者の統語産出傾向を比較分析した。

#### 3.1 実験協力者

日本人英語学習者 70 名および英語母語話者 11 名。前者には Oxford Quick Placement Test (Oxford University Press, 2004) を受験させ、スコアの平均値と中央値がほぼ同じ (約 34 点) であったため、34 点から 47 点を上位群 (40 名)、

16点から33点を下位群(30名)に分類した(60点満点).

### 3.2 実験素材

杉浦他(2009)で使用した30枚の絵のうち、絵の理解が容易で各統語構造を産出しやすいと思われた16枚を使用した。4種類の統語構造をプライム文とする各4枚(計16枚)およびフィラー12枚の計28枚の絵から成る2種類のテストを作成した。すべての絵はその直前に提示される英文(プライム文)とセットになっており、各テストのプライム文は、2つの構文のうちいずれかを含んでいた。例えば、PO/DO構文の産出傾向を見る場合、POプライム文(The boy brought some flowers to the girl.)またはDOプライム文(The boy brought the girl some flowers.)の後に、図1のような絵(ターゲット)が提示され、どちらの構文を産出するかを調査した。



図1 PO/DOプライム文の後に提示される絵の一例

### 3.3 実験手順

実験協力者は、調査の目的は、大学生が与えられた絵を見て、どのような文を書くのかを調べることでであると説明された。①コンピュータ画面上に提示される英文を音読し、スペースキーを押す、②次に絵が提示されるので、その絵に合う1文を出来るだけ素早く回答用紙に記入し、スペースキーを押す、という手順が説明され、練習問題を3問行った後、本実験を開始した。所要時間は約30分であった。

### 3.4 分析方法

本研究と同じく絵描写課題による統語的プライミングを扱っている Branigan, Pickering & Cleland (1999) に準じた。

## 4. 結果と考察

4種類の統語構造のうち、最も高い統語的プライミングが見られたPO/DOプライム文の後に提示される絵の描写に関する結果を以下に述べる。

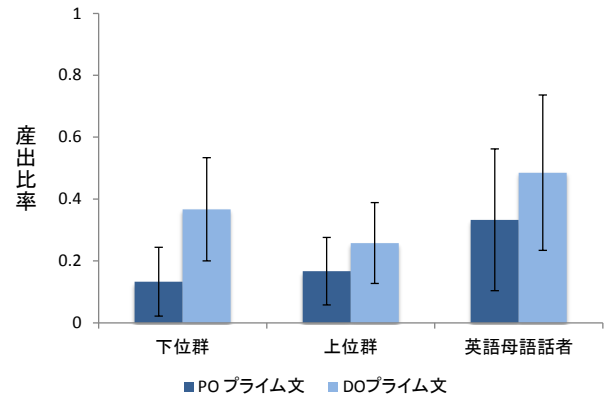


図2 プライム文の種類とDO構文の産出比率

2種類のプライム文(PO/DO)に対するPO/DO構文の産出比率を求めた。両構文の産出比率は連動しているので、DO構文の産出比率を従属変数とし、プライム文の種類(PO/DO)を被験者内要因、習熟度(3レベル)を被験者間要因として分散分析(F1:被験者分析とF2:項目分析)を行ったところ、プライム文の種類の主効果には有意差( $p < .05$ )が、習熟度の主効果には有意傾向( $p = .070$ )が、それぞれ観察されたが、プライム文の種類と習熟度の間に交互作用は見られなかった。

全体として、DOプライム文を提示したときの方が、POプライム文のときよりも有意に多くのDO構文が産出された。しかしながら、多重比較の結果、下位群では、DOプライム文を提示したときの方が、POプライム文のときよりも有意に多くのDO構文が産出されたが、上位群と英語母語話者では、プライム文の種類によって差は見られなかった。

これらのことから、日本人英語学習者では、下位群のみに、明らかなプライミング効果が見られることが分かった。その理由としては、下位群は、構文知識が乏しいため、できるだけプライム文を利用して文を作ろうとするが、上位群は、英語母

語話者同様、比較的自由に構文を産出できるため、プライム文の影響を受けにくいからではないかと考えられる。

## 5. 今後の課題

本研究では、データ数不足のため、習熟度による統語的プライミングの違いについて、十分な検証を行うことができなかった。今後、さらにデータ数を増やし、調査を進める予定である。また、動詞毎の特徴など、質的な角度からも分析を行いたい。

## 謝辞

本研究は、外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部基礎理論研究部会の調査データに基づくものである。他の研究メンバーは、以下の通り (五十音順)。泉恵美子 (京都教育大学)、里井久輝 (摂南大学)、杉浦香織 (静岡文化芸術大学)、中西弘 (東北学院大学)、堀智子 (東京工業高等専門学校)、藪内智 (京都精華大学)。

## 参考文献

- [1] Bock, K. (1986). Syntactic persistence in language production. *Cognitive Psychology*, 18, 355-387.
- [2] Branigan, H. P., Pickering, M. J. & Cleland, A. A. (1999). Syntactic priming in written production: Evidence for rapid decay. *Psychonomic Bulletin & Review*, 6(4), 635-640.
- [3] Oxford University Press. (2004). *Oxford Quick Placement Test*. Oxford: Oxford University Press.
- [4] 杉浦香織・門田修平・斉藤倫子・中西弘・中野陽子・森下美和. (2009). 「日本人英語学習者の統語産出傾向—絵描写課題における量的分析から」第 35 回全国英語教育学会鳥取研究大会発表予稿集, 276-277.